



●西山豊氏の最近の著書

『サイエンスの香り』（日本評論社）

『電子体温計の研究』（法律文化社）

『人とヒトデとサッカーボール』（三省堂）

専攻は数学であったが、大学紛争の影響か社会科学系の本もよく読んだ。岩波文庫の白帯というものだ。親に買ってもらった本棚に本を並べては、何冊そろえたといつては友達に自慢していた。松本清張や山本周五郎もよく読

きは、参考書や問題集を探すのに本屋にずいぶんお世話になった。受験には新しい情報が必要であったので、英語は旺文社の本がよいとか、世界史は山川書店のがよいとか、『傾向と対策』が役に立つとか……。とくに数学が好きだった私は、数学の問題集を探すためにあちこちの本屋をまわった。新しい問題集を見つけては解いていく私は、探検家のような気持ちだった。あれだけ集めた参考書や問題集も、大学に入れば無用の長物となり、身のまわりから活字が消え去ってしまった。でも大学のまわりには古本屋が多く、古本の魅力を知った私は、自転車に乗りながら一日中ぶらぶらと古本探しをしていた。

清張が有名になりはじめた頃で、古本屋で彼の名前があるものは、かたづけばしから買った。まるで『西郷札』の中の主人公のような気分だった。とくに初期の作品が読みたくて、それが欲しくて、古本屋で見つけたときは嬉しかった。タイトルは『松本清張短編集』で、書棚の一番高い場所に置いてあった。本の厚さは八センチぐらいで、短編ものがぎっしり詰まっていた。堅いケースまでついていた。大事に自転車の荷台にくくりつけて持って帰った。その本を一編ずつ読むのが楽しみであり、読書の後は、この本を枕にして寝ることがあった。かくして私にとっての「不良のたまり場」は「文化のたまり場」と化していったのである。



不良のたまり場

YUTAKA NISHIYAMA

西山 豊

私は、昭和二十三年生まれのいわゆる団塊の世代である。私の生まれたのは滋賀県の片田舎で、町には小さな本屋が一軒だけだった。「本屋は不良のたまり場だ」と親から聞かされていたので、本屋は遠い存在だった。どうしてこのように羨られたのかよくわからない。マンガ本を立ち読みするから、本屋さんに申し訳ないと考えたのだろうか。万引きでもして補導されるのが困ると思ったのだろうか。それとも大人の本が置いてあるので子供に読ませたくないと思ったのだろうか。当時は本も雑誌も出版数が少なく、テレビが出だした頃で番組も少なく、文化や情報に飢えていた。しかし、田舎は山や川など自然にふれる機会が多く、そこから学ぶことが多かった。ことさら活字から知識を吸収する必要もなかった。それに塾も予備校もなく教育に熱心な先生が多く、分らないことがあれば先生に聞けばよかった。先生と仲よ

くするテクニクを知っていた私は、いつも職員室にいりびたりだった。理髪店や歯科医院も町に一軒で、一時間以上待たされるのに慣れていたし、今のように一分一秒を争うこともなかった。ここは本屋の代わりをしていた。待ち時間をつぶすために『ああ無情』や『野口英世』などの伝記物を読んだ。そのころの本はふりがなもなく、文章はカタカナまじりが多く、漢字も古い字体で読みづらかったが、大人と同じ漢字が読めるのだという満足感があった。それでも、本屋に行ったことがある。一年に一回だけ、それも正月だけ。お年玉でマンガ本を買うためだ。正月号の特集は「ふろく」が楽しめで、七〜八個はついていたように思う。「福笑い」や「すごろく」の遊びに短編マンガがついていた。「少年キング」などのマンガ本は三〜四冊あったが、どれにするかは、ふろくの数で決めていたように思う。本屋とは縁遠かった私も、高校のと